

小林雅之著『上を向いて歩こう』

▽14/02/27

## 小林雅之著——東京争議団運動のDNAたっぷりの労働組合組織づくりを描く——『上を向いて歩こう』(本の泉社、2008年7月)

### 東京労働争議研究会のこと

1980代、東京争議団共闘会議運動をになった人びと——争議団当事者・卒業者、労働組合運動家、弁護士、フリーのジャーナリストなど——が、それぞれの争議の経過・背景資本分析・争議の社会的役割・争議団内部の団結・運動潮流を超えて争議支援を勝ちとる取り組み、勝利の要因の姿など、自発的に「東京労働争議研究会」(代表委員・清水明、市毛良昌、佐藤一晴、渡辺清次郎、小島成一弁護士他)をつくって研究していた。

当時は、沖電気争議などがまだ、全国展開してたたかわれていたときだった。

### 高知の地で争議団から学ぶ

国鉄「1047人解雇撤回」闘争をになったある人は、別の角度から「争議運動から学ぶ」自分の声を、インターネット上にUPしている。東京争議団のたたかいが全国に及ぼした影響の波が伝わってくるので、以下を読んでほしい。

「瀬戸の風、高知市の港南地域からも身近な政治と生活の話題を発信したい！2010年5月24日(月)、国鉄闘争と争議団」

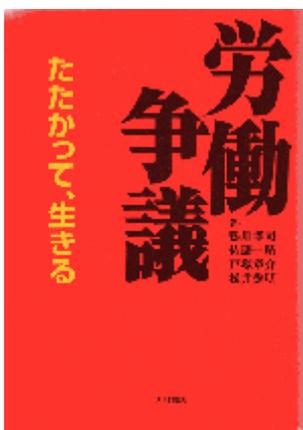
<http://kokekokkou.cocolog-nifty.com/blog/2010/05/post-d696.html>

「いくつもの全国争議団のメンバーとかがわってきた。沖電気争議団、日産厚木争議団、リーダースダイジェスト争議団、池貝鉄工争議団、東京電力争議団、武田薬品争議団、日立争議団連絡会など。四国では住友新居浜争議団、徳島船井・池田船井争議団などである。これらの争議団の特徴は、企業の中の労働組合が不当な権利侵害から労働者を守らない中で、裁判闘争を中心に争議をおこし、全国的に支援を広げていく闘い方である。印象に残るのは、日産と池貝のたたかい。年に2回全国的な支援要請のため、署名・カンパ・物品販売での生活支援を訴えながら、山場の全国統一行動で、全国一斉早朝宣伝に始まり、販売会社や背景銀行や資本の会社への要請行動をおこなうのである。日産自動車の販売店をまわったり、日本興行銀行の支店を要請訪問したことが記憶に残る。

争議団の方とよく飲みながらお話も聞かせてもらった。すごいには、この人たちの考えているスケールに大きさは、争議に勝つためには労働運動全体が社会に大きな影響を及ぼすまでやらなくては勝てないと

小林雅之著『上を向いて歩こう』

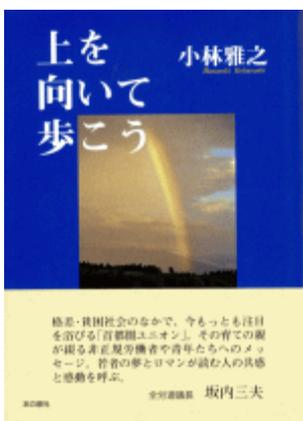
本気で思っていることでした。一つの争議団が、企業外の労働組合を動かし、「日産デー」や「池貝デー」全国的な統一行動が実施できるところまでやるということなのです。同時に、「早く争議を終わらせて、普通の家族との暮らしがしたい」と人間的な面を見たことでした。」



1980年代から90年代の争議解決の教訓をまとめた出版物のひとつが『労働争議——たたかって、生きる』（鴨川幸司、佐藤一晴、戸塚章介、松井繁明著、大月書店、1998年）だ。

### 東京公務公共一般の組織化とその実践

「東京労働争議研究会」は、10人近い人たちが運営委員会を弁護士事務所や全造船会館などで開き、毎月に近い例会報告を組織していた。編集子はその速記録を『労働法律旬報』に掲載するため、当番みたいな編集をになわされていた。その後、K編集長のもとで引き継がれ、2002年の研究会報告は52回を重ねている（いつまで掲載されているのか未取材）。



その時代、一番不思議だったのは、争議解決から労働組合組織化へ発展したのは、音楽家ユニオン、電

算労、コンピュータ・ユニオンなど少数の経験（職能労働組合・ユニオン）しか生まれてこなかった（それ自体貴重な成果だと思っているが）。

若い時代だったので、「争議を起こさせない労働者の組織化をテーマにしないのか」と大先輩の労働組合運動家に聞いて回っていたが、応えてくれたのは佐藤一晴さんの「フランス風ニュアンス」での会話だけだった。

フランス風から日本風の実践で生かされ、21世紀を前にした1990年代の東京に生まれたのが「東京公務公共一般労働組合」だ。

この経過は[「佐藤一晴さんのホームページがオープンされています」](#)を参照。

その担い手が『上を向いて歩こう』（本の泉社、2008年7月）を書いた小林雅之さんだ。小林さんは全国金属カコストロボ支部での争議を経験し（その当時の一端を[『今崎暁巳さんと私』](#)、[今崎暁巳さんを偲ぶ会編、下町人間の会発行、2011年6月](#)）、みずから「オルグとして就職し」、いまでは3000名を超える自治体職場の非正規職員を中心に作られている労働組合をつくりだし、そのご首都圏青年ユニオンなどを創設した。

小林さんは本のあとがきで、以下のように書いている。

この「東京公務公共一般」は、自治体職場の非正規職員を中心に作られている労働組合で、対象者の多くが不安定な雇用関係におかれていることから、年中首切り反対闘争を余儀なくされている。しかし実に驚異的な水準だと思っているのだが、毎年のように、解雇されたり或いは解雇予告された労働者を、三、四百人近くも救出できるのであるから、これはいま時、相当な力量を備えた組合だと言って良いだろう。だからこそ、わずか十数年でゼロから三千人の組織に成長を遂げてきたのである。それだけに、この組合の歴史には実に多くの教訓が積み上げられてきた。そして、これは現在進行形であるが、この労働者たちの中で、葛藤や悲憤にまみれた沢山のヒューマンドラマが繰り広げられてきたことを忘れてはならないだろう。

この組合を創立するときからのオルグであった私は、そうした思いを込めながら、このエッセイを書こうと思ったわけであった。

本書の中身は、都内各地で取り組んだ「産前産後闘争」「理事長追放」「オイラの仕事場放置自転車」など、小さな実践——東京都内で進展する公務員職場における非正規労働者の日常的姿から、組織化を描いている稀有な書である。

その実践は、日本各地に広がる公務職場発の「ワーキングプア」をのりこえる人間たちのたたかい・仲間発見など、民間職場に広がる「格差社会」をのりこえるヒントがある。

だから「3000人をを超える労働者の団結体」を、作り出したのだ。

## 東京争議団運動のDNA

小林雅之著『上を向いて歩こう』

本書のあんこは「東京争議団運動のDNAだ」。本書の中のアチコチに見えてくる——「わが母の教え 給いし歌」に描く、「四十五年の歴史を持つ東京争議団は、勝利するために強化すべき『四つの基本』（争議団の団結、職場からの闘い、産別・地域の共闘、裁判闘争）を定式化し、勝利に必要な『三つの必要条件』（具体的要求、情勢、闘う相手）を明確にすることを解き明かした——。

また『東京争議団物語』で描かれた、争議団共闘会議発足の状況を書いた「フレンチ・パラドクス」でも引用している——あの日、非常勤警備員の組合結成の場にいた私は、ふと東京争議団が結成された当時の話を思い出していた。

「倒産した新宿自動車教習所の狭い畳部屋。ぼんやり光を放つ裸電球の下で、数人の労働者たちが、争議団共闘会議の結成をひっそりと宣言したのである。総評や産別組織の誰にも知られないように、密かに『非正規部隊』東京争議団は生まれた」

悲壮な彼らの決意は見事に結実する。七〇年代に入ってから労働運動は、いわゆる「総行動方式」をうみ出し、独占企業や官庁を社会的に包囲しながら攻略していくという、戦後の労働運動の一大画期をなす高揚期を切り開いていった。その先導部隊に何時もいたのが争議団であった。こうして争議運動は「非正規」という一部分から労働運動全体の存在となったのだ。

別のところでは「敵に塩を送った男」・[山田晃一さん](#)（報知印刷労組）の話。これは知る人ぞ知る人間の生きた姿の一断面にすぎないが。

本書は1960年代からの『闘う労働者のど根性』『東京争議団物語』『正路喜社闘争』『東京争議団の15年』、そして数多く発行された「各争議団の物語」、その王道をひきつぐ「物語」であることは明白だ。将来的には「日本一般労働組合運動のベース」になるのではないか。

2013年8月26日（月）

## 佐藤一晴さんのHPがオープンされています

先日、ある人から「[佐藤一晴さんのHP](#)」（日本音楽家ユニオン、東京争議団事務局長、正路喜社労組、東京労働争議研究会、1932～2002年）を教えてくださいました。

佐藤一晴さんの検索をYahooですると、私が書いた追悼文が出てくる。

<http://jicr.roukyou.gr.jp/hakken/2002/116/116-satou.pdf>

追悼文集は、以下のページへ。

小林雅之著『上を向いて歩こう』

『一晴の夢・歩んだ世界——佐藤一晴 追悼・遺稿集』（2002年11月16日刊）

<http://www.k5.dion.ne.jp/~issey211/IR-00.htm>

しかし、HPに書かれた制作プランナーの鈴木信幸さんのことばがしみじみ感じさせられた。

本書に掲載された「日本的風土に『統一』の思想をどう実らせるか」である（表題は編集部による）。（引用者改行）

<http://www.k5.dion.ne.jp/~issey211/IF-home.htm>

原稿段階で一晴さんも校閲したが朱は入らなかった。これはしかし筆者名「会員S」とされただけで表紙も奥付もなく印刷されてしまった。（だから今になって発行日が特定できない）。実名では出せない、と判断されたことでもあったが、編集部は各自本業をもっていたことでもあり忙しさにまみれてそんなことになったのだろう。「こんな怪文書みたいなものは困るよ」とみなさんにしかられた。しかも、一晴さんはその講演にかかわって、ちょっとした災難に見舞われたとも聞いた。確かに実名では出せなかったのだ。（夕暮れの部屋で——遺稿を受けとった経過など、鈴木信幸）

<http://www.k5.dion.ne.jp/~issey211/IR-10.htm>

1980年代に決着がつけられないまま、今日の労働組合運動の現状を生み出した大きなテーマがそこにあったはずだ。

しかし、もう一文を載せておく。現在の「首都圏青年ユニオン」の母体は「東京公務公共一般労働組合」だが、そのリーダーである小林雅之さんの推薦者が、佐藤一晴さんだ。長文だが、全部掲載しておく。

連載 わいるどふらわー① ～花よ咲け 貧困と誇りの谷間に～作 小林 雅之 （東京公務公共一般労働組合の機関紙、378号、2010年3月9日号）

赤ちゃんが立った

オルグ採用面接に都職労本部を訪ねたのは八八年春だった。忘れもしない、面接には「推薦人」ご一行様が付き添ったのだ。向谷・前都職労委員長、市毛・旧東京地評組織局長、佐藤一晴・音楽家ユニオン書記長である。まるで入学試験に親がぞろぞろ付き添うみたいだが、実は連行されて「観念せい」と迫られた話なのだ。随分大袈裟な面接騒ぎだが、それほどに自治体非正規労働者の組織化は、宿願の課題として内外から期待された訳である▼聞けば、戦後自治体労働運動史で、オルグという名の専従者はあなたが最

初だと言われた。金属労働運動でオルグは当たり前になっていたが、改めてその責任の重大さを思った。あの先輩達は、みな泉下に遷られた▼九〇年八月二十二日が『都区一般』の誕生日である。目方は百七十人分。「産みの苦しみ」も二年がかり。「首切られる人たちを、なぜ入れるのか？」恵まれた正規職員のそんな無頓着で素朴な反応ならまだしも、「正規の入れ替わりに増える臨時・非常勤を組織するなど容認できるか」と立ち塞がる現場の多さに、しばしば立ち往生を余儀なくされた。思えば、有史以来そこは非正規の自立組織が共存することを許さない、正規公務員の聖地なのであった。分厚く凍りついて、びくとも動かぬ氷河が行く手を阻んでいた▼折しも、日本の労働運動は総評解体、連合と全労連の創立へ向かう激動のただ中。『都区一般』は母体の分割によって股裂き状態に遭った。草原の仔馬のごとく、生まれて直ぐにも一人立ちで歩かねば危ない環境に産み落とされたのだ▼それでも、『都職労統一派』諸氏の懸命な尽力によって着実に組織化は進んだ。都庁の職安・職業訓練校の非常勤、目黒区社会福祉協議会、墨田区のパート、と結集も膨らんでいった。ところがその動きに抗して、私の身辺には不穏な動きが忍び寄る。事務所の机はしばしば荒らされ、「子どもに気をつけるんだな」と脅迫電話が舞い込む。留守中の子ども達にまで執拗に脅迫電話が向けられた。『都区一般』を良く思わない勢力が恐れを抱いての卑劣な仕業であることは判っていた。「お父さんは正しいことしてるんだよ。挫けないで。しっかりね」家族を励まし、活動に拍車をかけた。必死の思いで結集した労働者の前進を阻めるものなぞあるものか、そう心に誓いながら。この事件は、非正規労働運動に未来があるからこそ起きた事だと、いよいよ確信を深めることになった▼組合費でも難航した。「二百円で充分」という都職労幹部との議論。「非正規が自立して闘うためにある。それを安いほど結構だなんて。貧者の絞りだす闘争資金は、くびきを解き放す血盟の証ですよ」▼初代委員長の人選も難儀した。都職労組織部の梅田さんが突然、「丹木さんに決めた」と一方的に本人に話を付けてしまった。「江東区役所の売店の？ えっ組合を何も知らない人？」私は腹が立つより呆れてしまった。しかし急いで断っておくと、彼女は実に良く精進して、かけがえなきリーダーとなったのだ。梅田さんと丹木さんには感謝▼釈迦ではないが、赤ちゃんが生まれて、すつくと立てば奇跡だが、非正規労組に奇跡はない。だが何倍速かで成長して、早く立たねばならなかった。そうした環境ゆえに逞しく育ったのである。

<http://www.yo.rim.or.jp/~kk-ippan/kikansi-backnumber/378/378.html>

制作プランナーの鈴木信幸さんの経歴もユニークなので下記のアドレスを入れておきたい。

<http://www.ac.auone-net.jp/~yohane/index.htm>

佐藤さんの「日本的風土に『統一』の思想をどう実らせるか」は、編集子として、別のページにUPしておく。

[それぞれの労働組合運動史・論 3](#)（現代労働組合研究会のHP）

『今崎暁巳さんと私』、今崎暁巳さんを偲ぶ会編、下町人間の会発行、2011年6月所収。

## いつも現場で語りあえた人●小林雅之

今崎暁巳さんは、カコストロボ倒産によって日立資本相手に職場占拠闘争を続けていた現場によく訪れては励ましてくれました。1970年代から1980年代は、日フィル再建闘争、沖電気解雇争議、日航差別撤廃闘争など大きな争議が相次いだ時代でした。今崎さんは優れた文学者であるばかりか、元々が労働法を研究されていた方でしたから、それゆえでしょう。彼の暖かい眼差しのなかには、労働運動の現状を見据える鋭い視点がいつもありました。ときに怖いと覚えるほどでした。しかし未来に希望を持って頑張りましょうといつも労働者を励まし続けた方でした。

企業占拠した品川のアジトに集まってくる写真家、音楽家、文化人たちは、「労働と文化」についてよく議論をしました。「労働運動のルネッサンスを起こそう」と、今崎さんと二人で熱く語り合ったものでした。彼は晩年、「ドキュメンタリーはねえ、もっと文学的地位が正当に扱われるべきだよ」と力説していました。その言葉はいまも重い印象となって残ります。

(元・全金カコ支部委員長、現・公務公共一般労組副委員長、日本民主主義文学会会員)

## ありがとうやさしい兄貴！●山田 晃一

昭和44(1969)年からたたかわれた報知争議を通し、労働旬報社の柳沢編集長の紹介でおつき合いが始まりました。争議中に行われたさまざまな集会、勝たせる会の催しなど常に顔を出し、報知争議勝利の一翼を担っていただきました。

私との個人的関係では、私を題材にした『民青新聞』での連載「さよならのいえないヤツ」(その後の小説『吼えろ青春』<労働旬報社、1975年>)の出版など大変お世話になりました。

体調不良は伺っていましたが突然の訃報に驚いています。やすらかに…。(報知新聞争議を通して)

**個人別組合と企業別組合**——企業社会を乗り越える労働運動の創設を (PDF版)

第52回東京労働争議研究会：報告〔『労働法律旬報』、No.1541、2002年12月10日〕

- 一 労働運動再生の糸口
  - 労働市場の変換に敏感であれ
  - 非正規労働者層の特質
  - 個人別労組への組織化
- 二 戦後日本の労働運動と企業別組合
  - 1 なぜ企業別組合からスタートしたのか
    - 非合法下での幹部養成の遅れ
    - 労働力売買における産別的機能の欠如
    - 統一的ナショナルセンターの不在
    - 労働力市場の前近代性
  - 2 産別組織は企業内組合の連合体になっていないか
    - 欧米にみる産業別組織の歴史と現状
    - 日本独占資本の復権と企業内組合への傾斜
    - 春闘—その陰と陽の歴史
  - 3 企業社会を支えてきた企業内労働組合
    - 生産性向上運動と春闘
    - 「国民春闘路線」の意義について
  - 4 「新時代の『日本的経営』」と企業内従業員組合
    - 企業は労組との信頼関係を維持できるか
    - 労組は労働者への求心力を維持できるか
  - 5 「均等待遇」と企業内従業員組合
    - 年功賃金に安住する
    - 非正規雇用に対する資本の戦略
    - 公務員組合・教員組合での変化
- 三 個人加盟組合の歴史と現在
  - 1 中小企業対策オルグ
    - 破竹の組織拡大
    - 中小企業労働者の戦闘性
  - 2 個人加盟方式の継承と個人加盟労組の現在
    - 各労組の活動内容
    - 組織拡大の要としての資金とオルグ

- 3 新たな組織化に時代を迎えて  
労働相談をきっかけにした組織化  
組織化の難しさはどこからくるのか
  - 4 地域合同労組が抱える問題  
理想の高さが裏目に  
基本方向は産業別・職能別結集
  - 5 一企業・複数団結体の意義  
非正規労働者の増大と企業内組合の命運  
企業組織の変貌のもとでの一企業・一労組主義の限界  
ヨーロッパとの違い
  - 6 個人別組合が優位性を発揮するために必要なこと  
あくまでも産業別・職能別の結集体であること  
指導・方針に単一性を持たせること  
たたかひの砦は企業の外に築くこと
- 四 組織化の実践から
- 1 公務公共一般労組の実践報告  
組織の概要について  
組織の運営について  
ネックレス現象  
異分野の集積体
  - 2 公務員労働運動の現状  
組織化の背景にあるもの  
自治体におけるリストラの実態
  - 3 パート職員の解雇撤回  
わずか4時間の決着  
「公務公共一般方式」の拡大
  - 4 ホームヘルパーの組織化—東京福祉介護労組の立ち上げ
  - 5 フリーターの組織化—首都圏青年ユニオンの実践  
彼らは本当にフリーターで満足しているのか  
実態は「土農工商犬猫フリーター」
  - 6 大学非常勤講師の組織化—首都圏大学非常勤講師組合の実践  
専任講師との驚くべき賃金格差  
全国規模のネットワーク化
  - 7 失業者の就職支援・仕事おこし—失業者ネットの実践
  - 8 移住労働者の人権保護と組織化—移住労働者ユニオンの実践
- さいごに—21世紀ユニオニズムの役割

小林雅之著『上を向いて歩こう』

これからの多数者にふさわしい労働組合を  
企業主義からの脱皮をめざして